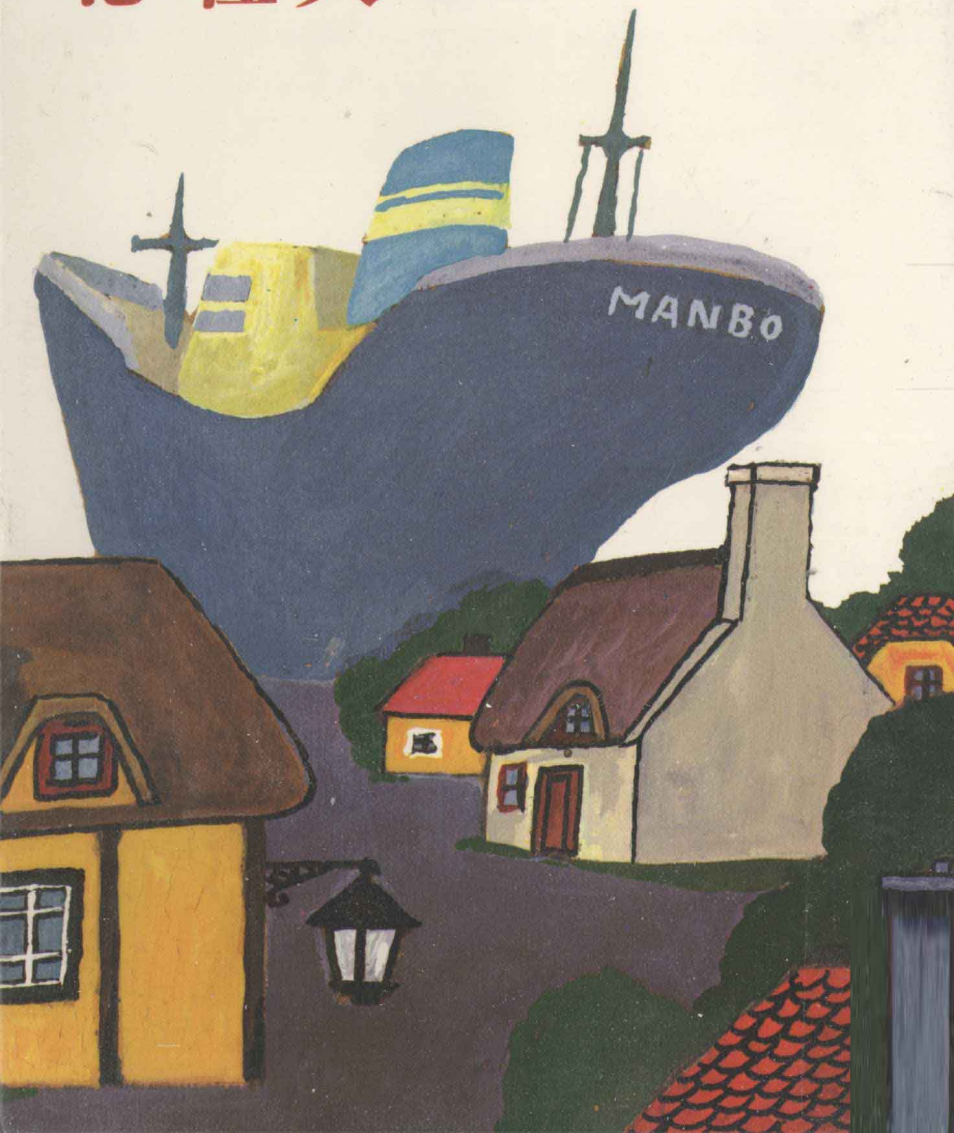
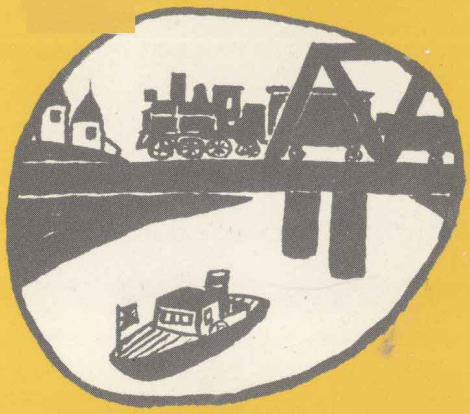
マンボウ周遊券

北杜夫





マンボウ周遊券

北 杜夫

新潮社

マンボウ周遊券

定価六〇〇円

印　刷　昭和五十一年六月五日
発　行　昭和五十一年六月十日
著　者　北　杜夫（きたもりお）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京四―八〇八
電話　業務部03（266）五一一一　編集部（266）五四一一
印刷所　株式会社光邦
製本所　株式会社大進堂

©1976 Morio Kita, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします

マンボウ周遊券＊目次

お初釜　九
〆切り　一四
ライター　一八
ヨーロッパ講演旅行
出発　二三
パリの休日　二六
講演の本番　三〇
旅のこぼれ話　三四
騒々しいお二人　三九
土産物　四三
競馬　四九
頑張れ、阪神
三重殺　五四
乱セ　五六
神頼み　六三
神々は死せり　六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

カレーライス　六七
夜食　七一
CM出演
　人見知りなのが　七五
　撮影　七八
　海篇、山篇　八四
　CM余話　八九
カンヅメ　九三
酒の持ち込み　九六
鯨の罐詰　九九
ふたたびライター　一〇一
女運転手　一〇三
はいれへん　一〇六
キツツキの穴　一〇八
マンボウ小笠原へ行く　一一〇
好日　一三五

昆虫店　一三七
ムシ屋　一三九
手紙　一三一
ひたすらだるい　一三四
マダガスカル紀行
ナイロビにて　一三六
きびしい入国　一四〇
タナナリブの動物園　一四四
汽車の大遠征　一四六
タマタブにて　一五一
日本人の尼さん　一五五
神秘な湖　一五七
市場　一五九
大使館でのパーティ　一六一
さらばマダガスカル　一六六
ふたたびパリにて　一六八

ソ連旅行

なにやら偶然に　一七〇
ナホトカ航路　一七四
団長の夢遊病　一八一
モスクワへ　一八五
痔の出血　一九〇
ボリショイ・サーカス　一九二
ソ連の日本語通　一九四
ドル・ショップなど　一九六
ソ連文字　一九九
危機一髪　二〇一
レニングラードにて　二〇三
バクウにて　二〇七
文化祭　二一二
終りのおわり　二一八

装幀・カット　谷内六郎

マンボウ周遊券

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

お初釜

むかしから茶道とは縁がなかった。

母は一応茶をたしなむが、非常にせっかちな性だから、せかせかと食堂——母が住んでいる兄の家のそれはテーブル、椅子である——にはいってきて、よく立ったまま茶を点てた。そしてまた、立ったままそれを飲むのである。

私もたまにそれを飲まされた。母の言うことには、

「お茶なんて形に縛られないでいいのよ」

という流儀らしかったが、それにしてもあまりといえば傍若無人なやり方であった。

そのため私はかなりの年齢になっても、茶の作法はまったく知らないできた。

たまたま阿川弘之氏が裏千家の千宗室氏と飯を食べるからつきあわないかと誘ってくださったのは、昭和四十二年のことと思う。私は茶の宗匠と聞いておそらくいかめしい人だろうと思い、二の足を踏んだが、結局御好意に甘え、妻と二人で阿川氏の車に乗せて頂き、氏の上手ではあるがはらはらする運転のうちに、柳橋の料亭へ行った。

以前、私はこのヤナギバシをリュウキョウと言っていて、家人に笑われたものである。

さて、千宗室氏とお会いしてびっくりしたことに、初めの茶の宗匠という概念を裏ぎり、スポーツマンといってもいいようなすらりと長身な好男子だったことだ。なにより会話も気さくできびきびしていた。特攻隊の生き残りの由で、それなら阿川氏と親交のあるのももっともなことだ

と思った。

そんなこともあって翌四十三年の一月十七日、裏千家の東京道場のお初釜にはじめて招ばれた。

私は初釜という文句すら知らない。なにかしら、

「茶釜式、茶釜式」

と呟いていた。

要するに、茶を点てる釜の式だから、ついつい茶釜式と思いこんだのである。

ところで、茶をやる人のあいだでは、裏千家のお初釜に招ばれるということは、たいそうな名誉であるらしい。

そんなことは何も知らぬ私は、招待されたのだからと思って、お包みも持たずに出かけた。ふだんなら縁のないお茶の席などへ行くことはしなかったろうが、その当時、私は妙に活気があって、出なくてもよい会などにも出没していたのである。

当日は——そのころ午後起きるのがふつうだったが、朝から起きた。私の招ばれた時間はたしか午後一時だったからだ。

目的地に着き、東京道場の非常に感じのよいまだ若い女の先生に案内されて、小間に通された。ところが鴨居が低いから、たちまち頭をガツーンとぶつけた。

痛かったが、声には出さなかった。小間には、いかにも大僧正という感じのする恰幅のよい、しかも金ピカの袈裟をかけられたお坊さんと、もっと若い黒裝束のお坊さんがおられた。お坊さんという方とも私は縁がない。なにを話してよいかわからない。

そのうちに、無理をして早起きしたせいか、腹具合がおかしくなり、私はトイレに行った。尾籠な話だが、かなりの腹こわしのようである。そこで、大切なお初釜が始まってからまたトイレ

へ行くようになるとたいへんなので、私はずいぶんと長いこと坐っていた。トイレのなかで煙草をふかし、ゆうゆうとしていた。

さて、そこを出ておどろいた。参会者の大部分は女性である。トイレは二つしかない。その一つを私が長々と占領していたため、かなりの行列ができている。

私は面目を失って、かなり恥ずかしい思いで急いで小間に戻った。すると、またもや頭を鴨居にガツーンとぶつけた。

ようやく大ぜいの人間が二階へ通された。床の間の掛軸だの花だの花器だの置物を見るが、何一つわからない。はじめに濃茶を飲まされる。これは私にとっては苦手である。そのあと、みんながやっているように、まわってきた茶碗を手にとり、ひっくり返して裏を見たりしたが、もし落っことしたりすると大事だから、慌てて次へまわす。

この年の六月に私はアメリカへ行き、ニューヨークの裏千家支部の道場を見学したが、その際聞いた話によると、外人も濃茶は苦手だそうである。もちろん正坐もそうだ。見ていると、膝をのばしたり胡坐(あぐら)をかいたまま茶を飲んでいる。支部の先生は、そういうところは自由にさせていると言っていた。

それよりも、そのとき私はニューヨークに八年住んでいる慶応病院の医者の後輩と一緒に行ったのだが、道場には二人の若い日本女性が手伝っていた。その一人が外人をまえにしてお点前(てまえ)をしているさまを見学しているあいだ、後輩の医者はもう一人の女性とすばやくデートの約束をしてしまった。彼女はニューヨークにきて間もないというので、それならドライブに連れていってあげる、と甘言を弄したらしい。後輩はアメリカ人と結婚していたが、三年ほど前に離婚しており、なかんずく日本女性に飢えていたらしい。

そして、郊外にドライブして、アメリカ流にいきなり手を握った。すると、激しく拒否され、つまるところふられてしまった。それより困ったことは、私までが同類と思われてしまったらしく、アメリカをまわってふたたびニューヨークに戻ってきたとき、後輩は北が帰ってきたから歓迎会でもやりませんか、と私をタネにして彼女らに電話をしたら、いま大事な客がきていて時間がありません、というすげない返事であった。

さて、東京の茶釜式、いやお初釜の話に戻るが、そのあといよいよ宗匠のお点前を拝見するわけである。

みんな遠慮して席をゆずりあうので、上座から三番目くらいに坐らされてしまった。いちばんの上席は先述の大僧正である。

菓子が出る。隣の人の様子を窺って、そのとおりに食べる。お点前を頂くにも、これもそっくり人真似をしてすする。茶碗を二回まわすか三回まわすか忘れてしまってヒヤヒヤする。

しかし、上席の大僧正も、それほど茶道の作法に習熟してはいないらしく、ときどき隣のお坊さんに聞いている。これでずいぶんとホッとした。

宗匠は緊張した雰囲気をほぐすように、気さくに話しながら、流れるようにごく自然に、同時に折目正しく茶を点てる。なるほどこれが茶道というものか、と感じいると共に、わが身がつくづく恥ずかしい。

あとで、立派なお膳が出た。私は腹具合を考え、カズノコなど好きなものだけちょっぴり食べ、しかし酒はさされるままに飲んだ。このお膳の残ったものを包んで持って帰るのが作法であるらしい。

しかし、私はそのあとに予定を持っていた。なにせ活気のあった時期だったからである。

そこで、お膳をほったらかしておいて、
「途中で失礼させて頂きます」
と言い、あたふたと席を立った。
それから玄関に出てみると、靴が出されていたが、どうも私の靴でないようにとっさに直感した。
そこで私は、
「これはぼくの靴じゃありません。第一、私はこんな上等の靴をはきません」
と言い、自分で沢山ある靴をひっかきまわし、
「あ、これだ、これだ」
と凄い勢いで足を突っこみ、そのまま電光のように帰ってしまった。
ところが、はじめ出された靴こそまぎれもなく私の靴だったのである。
あとで当然、靴がなくなり騒ぎがあった。翌日か、女の先生から私の家に電話があり、私がはいてきてしまった靴は、川崎大師さまの御住職のものであることがわかった。御住職は仕方なしに、草履を借りてお帰りになった由である。
まさしく顔から火の出る思いとはこういうことであろう。
しかし、裏千家ではこれに懲りず、毎年お招き状を頂いている。私は母や妻と出かけてゆき、今度はあまり失態をせずに済んだ。そのうち、どういうわけか、「裏千家関東青年支部委員」とかいう免状を頂いた。
これはいくらなんでも厚かましすぎる話だ。かつ、私は昨今、以前のように活気のある状態を呈さなくなってきた。

それでここ何年か、茶釜式、いや、お初釜の席にはずっと失礼している次第である。

〆切り

私も文筆生活にはいってから、いつの間にか十七年の歳月が流れた。

その間、作品の出来はともあれ、〆切りを守るということに関しては、日本作家のなかでも最優等生の部類に属するのではないかと信じている。

この十七年間、〆切りに追われてギリギリになったということは、ただの二回しかない。たいていは一週間まえ、十日まえ、ひどいときには何ヵ月まえに原稿はできている。これは、一つには私が気が弱いことと、文壇に出だしのころに〆切りに追われて塗炭の苦しみを嘗めたことが原因になっているらしい。

それは忘れもしない『夜と霧の隅で』を書きあげるときであった。この作品は昭和三十三年に書きだしていて、ただ途中にマグロ船の初航海がはさまり、帰国したあとも十二指腸潰瘍を患ったりして長いこと中断していたものである。

昭和三十五年の一月、私は『どくとるマンボウ航海記』を書き終え、再度、この中篇にとりかかった。

難行して、〆切りを一ヵ月遅らせてもらった。しかし、次の月の〆切り日が迫ってきても小説はまだ完成しない。のみならず、〆切りが迫ったということが心理的圧迫になって、筆はなおさら進まない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co